

《ひどい誤解》 作品解説

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシーニ協会紀要）第28号（2005年発行）の拙稿『ロッシーニ
全作品事典（19）《ひどい誤解》』。改訂版をHPに掲載します。（2011年9月改訂／2014年2月再改訂）

I-3 ひどい誤解 *L'equivoco stravagante* 註：「とんでもない誤解」の訳題も使われる。

劇区分 2幕のドランマ・ジョコーゾ・ペル・ムジカ（dramma giocoso per musica in due atti）

台本 ガエターノ・ガズバリ（Gaetano Gasbarri, 1770-1844）

第1幕：全13景、第2幕：全15景、イタリア語

作曲年 1811年10月（26日以前）

初演 1811年10月26日（土曜日）、ボローニャ、コルソ劇場（Teatro del Corso）

人物 ①エルネスティーナ Ernestina（コントラルト）……ガンベロットの娘、文学好き
②ガンベロット Gamberotto（バス [ブッフオ]）……成り上がりの富農
③ブラリッキオ Buralicchio（バス [ブッフオ]）……若く愚かな金持ち、エルネスティーナの婚約者
④エルマンノ Ermanno（テノール）……貧しい若者、エルネスティーナに恋している
⑤ロザリーア Rosalia（ソプラノまたはメゾソプラノ）……エルネスティーナの小間使い
⑥フロンティーノ Frontino（テノール）……ガンベロット家の召使、エルマンノの親友
他に、農夫、文学者、軍人、召使たち（男声合唱 [テノール I・II、バス]）

初演者 ①マリーア・マルコリーニ（Maria Marcolini, 1780頃-?）

註：初版台本はマリエッタ・マルコリーニ（Marietta Marcolini）と記載。

②ドメーニコ・ヴァッカーニ（Domenico Vaccani, ?-?）

③パオロ・ロジク（Paolo Rosich, 1780頃-? [1840以降]）

④トンマーゾ・ベルティ（Tommaso Berti, ?-?）

⑤アンジョラ・キエス（Angiola Chies, ?-?）

⑥ジュセッペ・スピーリト（Giuseppe Spirito, ?-?）

管弦楽 1フルート、2オーボエ、2クラリネット、2ファゴット、2ホルン、2トランペット、大太鼓、シンバル、小太鼓、弦楽5部、レチタティーヴォ・セッコ伴奏楽器¹

演奏時間 約130～135分（序曲：約6～9分、第1幕：約65分 第2幕＝約60分）註：序曲の選択によって異なる。

自筆楽譜 消失（未発見）

初版楽譜 Giovanni Ricordi, Milano, 1851.（ピアノ伴奏譜初版）

全集版 I/3（未出版。Marco Beghelli e Stefano Piana 校訂）

楽曲構成（自筆楽譜消失のため確定しない。以下区分は2002年ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル上演プログラムに準拠）

序曲 Sinfonia（不詳）

註：自筆楽譜を消失し、現存する筆写譜に含まれる序曲も一致しない。「ロッシーニは序曲を書かなかった」「不詳の旧作を転用した」「バリの筆写譜の不詳の序曲がそれに当たる」など諸説ある。オトス版では《トルヴァルドとドルリスカ》（1815年）の序曲を採用しているが、後に書かれた作品を適用するのは問題と言わざるをえない。

第1幕

N.1 導入曲〈壁の向こうに愛しい人が隠れているなら *Si cela in quelle mura*〉（ロザリーア、エルマンノ、フロンティーノ、ガンベロット、男声合唱）註：ROFプログラムの構成表では合唱の記載が欠落。

— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈わしが鋏をふるっていた頃には *Nei tempi in cui la zappa io maneggiava*〉（ロザリーア、エルマンノ、フロンティーノ、ガンベロット）

N.2 ブラリッキオのカヴァティーナ〈愛嬌のある私の目に *Occhietti miei vezzosi*（ブラリッキオ）

— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈私のような美男には *Ch'io sia bello convengono*〉（ブラリッキオ）

N.3 小二重唱〈ああ、お出でなさい、私の懐へ *Ah, vieni al mio seno*〉（ガンベロット、ブラリッキオ）

— 小二重唱の後のレチタティーヴォ〈愛しい花嫁は何をされてますか？ *Che fa la cara sposa?*〉（ガンベロット、ブラリッキオ）

- N.4 エルネスティーナのカヴァティーナ〈ああ、彼女はなんと静かに／心に空虚が感じられる *Oh come tacita / Nel cor un vuoto io provo*〉(エルネスティーナ、男声合唱)
 — カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈私の文人たち、メルクーリオ [メルクリウス] の息子たち *Miei letterati, figli di Mercurio*〉(エルネスティーナ)
- N.5 合唱〈行きましょう、観察し、発見しましょう *Andrem, vedrem, faremo*〉(男声合唱)
 — 合唱の後のレチタティーヴォ〈娘や！／お父さま！／そのまま待っていてくれ *Figlia! / Mio generante! / Aspettan fermi*〉(エルネスティーナ、ガンベロット)
- N.6 四重唱〈同時に紹介しよう *Ti presento a un tempo istesso*〉(エルネスティーナ、エルマンノ、ガンベロット、ブラリッキオ)
 — 四重唱の後のレチタティーヴォ〈肉体のある器械には *Le macchine corporee*〉(エルネスティーナ、エルマンノ、ブラリッキオ)
- N.7 ガンベロットのアリア〈話してください、弁舌さわやかに。そうすれば *Parla, favella, e poi*〉(エルネスティーナ、ガンベロット、ブラリッキオ)
 — アリアの後のレチタティーヴォ〈裏切りたくはありませんわ *Non vorrei che tradito*〉(ロザリーア、フロンティエーノ)
- N.8 ロザリーアのアリア〈あの愛の抜け目なさを *Quel furbarel d'amore*〉(ロザリーア)
 — アリアの後のレチタティーヴォ〈何をおっしゃるのです、先生 *Che ne dite, maestro*〉(エルネスティーナ、エルマンノ)
- N.9 二重唱〈ええ、他の方を見つけられるでしょう *Si, trovar potrete un altro*〉(エルネスティーナ、エルマンノ)
 — 二重唱の後のレチタティーヴォ〈だめです、ブラリッキオさん *No, signor Buralicchio*〉(エルネスティーナ、ガンベロット、ブラリッキオ)
- N.10 第1幕フィナーレ〈愛らしき瞳を思い *Volgi le amabili*〉(ロザリーア、エルネスティーナ、エルマンノ、フロンティエーノ、ガンベロット、ブラリッキオ、男声合唱)
- 第2幕**
- N.11 導入曲〈なぜ混乱しているのか *Perchè sossopra*〉(フロンティエーノ、男声合唱)
 — 導入曲の後のレチタティーヴォ〈計画を実行しようと *Il progetto eseguisca*〉(ロザリーア、フロンティエーノ)
- N.12 フロンティエーノのアリア〈すぐに分かるさ *Vedrai fra poco nascere*〉(フロンティエーノ)
 — アリアの後のレチタティーヴォ〈彼が向こうからやって来るぞ *Ei vien da quella parte*〉(エルネスティーナ、フロンティエーノ、ブラリッキオ)
- N.13 エルネスティーナとブラリッキオの二重唱〈どうぞお出でください、私の近くに *Vieni pur, a me t'accosta*〉(エルネスティーナ、ブラリッキオ)
 — 二重唱の後のレチタティーヴォ〈なんという悪党だ！ どう見たって *Che briccone! Al vederlo*〉(エルマンノ、ガンベロット、ブラリッキオ)
- N.14 エルマンノのシェーナ〈ぼくはほったらかしか？ *E mi lascia così?*〉とアリア〈猛烈な怒りに *Sento da mille furie*〉(エルマンノ)
 — アリアの後のレチタティーヴォ〈見て、ロザリーア。彼は逃げてしまったわ *Miralò, Rosalia, ei fugge*〉(ロザリーア、エルネスティーナ、エルマンノ)
- N.15 五重唱〈甘き希望よ、ああ、降りてきてください *Speme soave ah scenda*〉(ロザリーア、エルネスティーナ、エルマンノ、ガンベロット、ブラリッキオ、男声合唱)
 — 五重唱の後のレチタティーヴォ〈女主人は逮捕されたのか？…*La padrona in arresto?...*〉(ロザリーア、フロンティエーノ、ガンベロット、ブラリッキオ)
- N.16 ガンベロットのアリア〈私の、パッラデ [パラス] の子孫が *Il mio germe, che di Pallade*〉(ガンベロット)
 — アリアの後のレチタティーヴォ〈もしも私が不確かでも *Se io non fossi certo*〉(エルネスティーナ、エルマンノ、ブラリッキオ)
- N.17 エルマンノのカヴァティーナ〈愛情のこもった情熱の *D'un tenero ardore*〉(エルマンノ)
- N.18 エルネスティーナのリチタティーヴォ〈危険は去った *Il periglio passò*〉と合唱付きロンド〈もしもお前に幸せが戻ったら *Se per te lieta ritorno*〉(エルネスティーナ、男声合唱)
 — ロンドの後のレチタティーヴォ〈あなたは悪いことをしました *Avete fatto male*〉(フロンティエーノ、ブラリッキオ)
- N.19 第2幕フィナーレ〈逃げてしまおう。それが一番の方策だ *Scapperò: questo mi pare*〉(ロザリーア、エルネ

ステイーナ、エルマンノ、フロンティエーノ、ガンベロット、ブラリッキオ、男声合唱)

物語 (時と場所の指定なし)

【第1幕】

ガンベロットの屋敷の外。貧乏な青年エルマンノが現れ、ガンベロットの娘エルネステイーナへの思いを歌う。ガンベロット家の従僕フロンティエーノと小間使いロザリーアがエルマンノの恋心を冷やかしていると、狩の音楽が聞こえ、農夫たちの合唱に続いてガンベロットが現れる。エルマンノはフロンティエーノの斡旋によりエルネステイーナの家庭教師になる (N.1 導入曲)。エルネステイーナの婚約者ブラリッキオが現れ (N.2 ブラリッキオのカヴァティエーナ)、ガンベロットと大げさな挨拶を交わす (N.3 ガンベロットとブラリッキオの小二重唱)。

図書室では、本と文学者たちに囲まれたエルネステイーナが空しさをおぼえている (N.4 エルネステイーナのカヴァティエーナ)。文学者たちが去ると (N.5 合唱)、ガンベロットが婚約者と家庭教師を紹介しにやってくる。文学者を気取るエルネステイーナの言葉遣いに戸惑うブラリッキオに対し、ガンベロットは滑稽な挨拶を伝授する (N.6 四重唱)。ガンベロットが去ると、エルマンノとエルネステイーナの親しげなそぶりにブラリッキオが腹を立てる。ブラリッキオは戻ってきたガンベロットに苦情を言い、ガンベロットを怒らせる (N.7 ガンベロットの Aria)。フロンティエーノの心配をよそに、ロザリーアは「恋なんてそんなものよ」と歌う (N.8 ロザリーアの Aria)。エルネステイーナと二人きりになったエルマンノは熱い思いを語り、エルネステイーナも心動かされる (N.9 エルネステイーナとエルマンノの二重唱)。

二人が去るとブラリッキオとガンベロットが現れる。ブラリッキオが婚約者の態度に苦情を言っていると、エルネステイーナが来て父と一緒にブラリッキオをやりこめ、三人は仲直りする。その様子を見たエルマンノが絶望して自殺しようとするのでフロンティエーノとロザリーアが助けを求め、大騒ぎになる。農民たちが来て、騒ぎを聞きつけた軍隊が来ると告げて全員大混乱に陥る (N.10 第1幕フィナーレ)。

【第2幕】

ガンベロットの屋敷の一室。フロンティエーノが農民たちと先の出来事について話している (N.11 導入曲)。フロンティエーノはロザリーアに自分の計画を説明する。彼は友人の恋を成就させるために、「エルネステイーナは実は去勢された息子で、軍隊から脱走させて娘に偽装しているのだ」という贋手紙をブラリッキオに読ませようというのだ (N.12 フロンティエーノの Aria)。手紙を読んで驚くブラリッキオをフロンティエーノがたきつけ、まんまと騙し、話を信用したブラリッキオは何も知らぬエルネステイーナに侮辱的な態度をとって口論になる (N.13 エルネステイーナとブラリッキオの二重唱)。彼は復讐のため、軍の司令官に密告しに行く。一方、解雇されたエルマンノはその撤回をガンベロットに求めるが、拒否されて怒り狂う (N.14 シェーナと、エルマンノの Aria)。エルネステイーナとエルマンノが打ち解けると、エルネステイーナを男と信じるブラリッキオは二人の様子を呆れ顔で見守る。行進曲とともに兵士の一団が来て一同混乱し、エルネステイーナは逮捕連行される (N.15 五重唱)。婚約者が逮捕されて平気な顔をしているブラリッキオに、ガンベロットは怒りを爆発させる (N.16 ガンベロットの Aria)。

古風な牢獄。エルネステイーナが独り思い悩んでいると、高窓からエルマンノが忍び込んでくる。エルマンノは愛を告白して励まし (N.17 エルマンノのカヴァティエーナ)、彼女を連れて窓から逃げる。舞台は城に隣接した村に変わり、軍服を着たエルネステイーナがエルマンノと兵士たちと一緒に登場し、自由になった喜びを歌う (N.18 レチタティーヴォとエルネステイーナの合唱付きロンド)。

ガンベロットの屋敷の大広間。フロンティエーノは、密告者はひどい目に遭うから逃げるようブラリッキオに促すと、人の来る気配に身を隠す。武装した村人たちとガンベロットが来て、エルマンノとエルネステイーナも姿を現す。そしてブラリッキオが袋叩きにされそうになると、エルネステイーナは皆を制止し、彼にここから出て行くよう命じる。ブラリッキオは彼女を指差し、「みんな、こいつは去勢した男だぞ」と抗弁して笑い者になる。フロンティエーノの嘘が騒ぎの原因と知ってガンベロットは怒るが、皆にエルネステイーナとエルマンノを結ばせるよう嘆願され、了承する。全員喜びのうちに幕が下りる (N.19 第2幕フィナーレ)。

解説

【作品の成立】

デビュー作《結婚手形》を1810年11月3日にヴェネツィアのサン・モイゼ劇場で初演したロッシーニは、ほどなくボローニャに戻った。翌1811年初頭、同地の音楽アカデミーのマエストロ・アル・チェンバロの職を得た彼は、5月10日にハイドンのオラトリオ《四季》の演奏に関与し、合唱とソリストの指揮を務めた。続いてロッシーニはボローニャのコロソ劇場 (Teatro del Corso) の秋シーズンにマエストロ・アル・チェンバロのポストを得た。このとき同劇場では二つのオペラ・ブッフアの上演が予定されていたが、ステーファノ・パヴェージ作曲

《マルカントーニオ殿 (Ser Marcantonio)》の再演が告知されただけで、もう1作は未定だった。このことから劇場側は当初ロッシーニに新作を委嘱するつもりはなく、9月21日のシーズン開幕後に歌手たちの推薦により依頼があったと推測されている²。

台本作者ガエターノ・ガズバリ (Gaetano Gasbarri, 1770-1844)³は、1793年からナポリで喜歌劇台本を書き、1808年以降はボローニャの劇場にも台本を供給していた。この秋シーズンには男装役で人気を博したコントラルト、マリーア・マルコリーニ (Maria Marcolini, 1780頃?) をプリマ・ドンナとする歌手団が生まれ、ガズバリも彼女の魅力を最大限に引き出すべく《ひどい誤解》の台本を書き下した。ちなみに同年9月23日コロソ劇場で《マルカントーニオ殿》を観劇したスタンダールは、同日付の日記でマルコリーニについて次の感想を述べている——「プリマ・ドンナのマリエッタ・マルコリーニ夫人は完璧な優美さを具えている。さらに力強さがあれば良いのだが。だが、この優美さは驚くべきもので、私たちがフランスにおいて持つべきものであろう」⁴。

ロッシーニがコロソ劇場と交わした契約や作曲経過を詳らかにする史料は現存せず、明らかなのは《ひどい誤解》の初演が1811年10月26日に行われ、聴衆の評判も良かった、という事実のみである。10月29日付『レダットーレ・デル・レーノ (Redattore del Reno)』(1811年N.43)の批評によれば、第1幕の導入曲、四重唱、二重唱、フィナーレ、第2幕の五重唱、二重唱、マルコリーニのアリアが称賛され、作曲者はカーテンコールを求められ、第2幕の五重唱曲とマルコリーニのアリアがアンコールされた⁵。



マリーア・マルコリーニ

だが、問題がないわけではなかった。ガズバリの台本には性的な隠喩やきわどい言葉が含まれ、その下品さに聴衆が反感を抱いたからである。そして「娘として育てられたが、実はカストラートにするため去勢された息子」「軍隊を脱走して匿われている」といった設定が公序良俗に反すると警察当局に批判され、上演は最初の三回で打ち切られた。劇場側は作品をドメーニコ・プッチーニ (Domenico Puccini, 1772-1815) の《クイント・ファビオの勝利 (Il trionfo di Quinto Fabio)》に切り替えたが、ロッシーニはその稽古中に自分の指示に従わないコロソ劇場の合唱団員に棒で殴りかかり、警察に逮捕拘留されている(11月8日)。これは、ロッシーニがクイント・ファビオ役のマルコリーニのために合唱とカヴァティーナ《万歳ローマ、クイント万歳 (Viva Roma e Quinto viva)》《愛しき祖国、無敗のローマ (Cara Patria, invitta Roma)》を作曲して挿入しようとしたのに対し、合唱団が反発したためと思われる。その10日後には、シモーネ・マイル《スコットランドのジネーヴラ》の稽古にロッシーニが現れず、問題となっている⁶。

【特色】

《ひどい誤解》の自筆楽譜はデビュー作《結婚手形》同様、確認されたことがなく、第二次世界大戦の戦火で消失したと推測する研究者もいる。19世紀中に出版された全曲楽譜は1851年にリコルディ社の刊行したピアノ伴奏譜が唯一であるが、それ以前に筆写された複数の楽譜や初版に当たる楽曲ピースが現存することから作品の復元は可能である。しかし現存資料の間に数多くの異同があり、とりわけ序曲については現在も未確定となっている(筆写譜ごとに序曲が異なり、そもそもロッシーニの自筆楽譜に序曲を欠いていた可能性もある)。ボストンとフィレンツェの筆写譜とリコルディ版の初版には《トルヴァルドとドルリスカ》(1815年)の序曲が使用され、現行オトス版(後述)にも採用されているが、これが原曲とは見なせない。2002年のロッシーニ・オペラ・フェスティバル初上演ではパリ筆写譜にある序曲が演奏されたが、校訂者も確証のないことを認めており⁷、最終判断は全集版の出版を待たねばならない。

ロッシーニの早熟な才能は、ガンベロットとブラリッキオの小二重唱〈ああ、お出でなさい、私の懐へ (Ah, vieni al mio seno)〉(N.3)における言葉の繰り返しや同音反復のかもしれない滑稽味や、四重唱〈同時に紹介しよう (Ti presento a un tempo istesso)〉(N.6)のアンサンブルの随所に聴き取れる。尊大に歌い出されるガンベロットのアリア〈話してください、弁舌さわやかに。そうすれば (Parla, favella, e poi)〉(N.7)も秀逸で、その素材は後に《絹のはしご》(1812年)ジュリアとジェルマーノの二重唱に再使用される。第1幕フィナーレ〈愛らしき瞳を思い (Volgi le amabili pupille elastiche)〉(N.10)は三つの部分からなり、中間部エルネステーナ、ガンベロット、ブラリッキオの秀逸な



《ひどい誤解》ロザリーアのアリア(楽曲ピース初版、リコルディ社、ミラーノ、1824年。筆者所蔵)

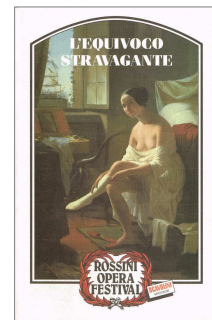
三重唱は後に《絹のはしご》と《試金石》(1812年)に改作転用される。これに対し、エルネステーナの合唱付きロンド(N.18)はヒロインの大アリアとしては貧弱で、デビュー間もないロッシーニの限界を感じさせる。

旧作からの改作転用に《結婚手形》(1810年)ズルクのカヴァティーナの素材を用いたブラリッキオのカヴァティーナ(愛嬌のある私の目に(*Occhietti miei vezzosi*))(N.2)があり、後に《イタリアのトルコ人》(1814年)でも改作使用される。最初期の作品ですぐにお蔵入りになったため、他にも後のオペラに素材の再使用が認められ、その意味では若々しい楽想や音楽的着想の原点に位置するところが《ひどい誤解》の最大の魅力といえるかもしれない。

ガズバッリの台本は言葉遊びの点でロッシーニの資質に合っているものの、第2幕後半のあわただしい舞台転換——牢獄シーンの挿入から、城に隣接した村への転換——がいかにもとってつけたようで、演劇的に無理がある。そもそも脱獄したエルネステーナがすぐに軍服を着て男装して現れ、兵士たちから自由万歳と称えられるのは支離滅裂で、オトス版の校訂者が曲順を入れ替え、ロンドを削除したのも、その辺に理由があるのだろう。ガズバッリは18世紀末の三流ナポリ喜歌劇台本作者であり、「文学者気取りのヒロイン」「去勢者に対する揶揄」「牢獄」「救出」「男装」といった素材もすべて使い古されたものであった。

【上演史】

前記のように《ひどい誤解》は1811年10月26日に初演され、最初の3回で打ち切られた。再演は1825年謝肉祭におけるトリエステのテアトロ・グランデが唯一であるが(初日は1825年1月1日)、第三者による改作で⁸登場人物の名前も全面的に変更されている。以後1965年9月7日にシエナで復活上演されるまで140年間日の目をみなかった。この復活上演はキジアーナ音楽アカデミーの依頼でオペラ作曲家ヴィート・フラッツィ(Vito Frazzi,1888-1975)の作成したエディション(現行オトス版)が使われたが、2幕から3幕への恣意的改変、種々のカットと楽曲の入れ替え、さらにはエルネステーナの声種をコントラルトからソプラノ・レジーエロ用に移調し、ロザリーアのパートも移調するなど原曲をいちじるしく歪めている。続いて1968年ウェクスフォード、1973年ベルナ(ドイツ語版)、1974年ナポリ、1993年、1994年ヴィルトバートと再演が続いたが、1999年にブリュッセル筆写譜に基づくドイツ・ロッシーニ協会版が作られ、2000年にその初演がヴィルトバートで行なわれた。ロッシーニ財団の第一次批判校訂譜による上演も2002年8月ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルで行われ、21世紀には世界各地で舞台にかけられている。日本での本格舞台初演は、2005年1月14日、東京オペラプロデュースが新国立劇場の中劇場で行なった(上演時の題名は《とてつもない誤解》。オトス版を使用。演出：馬場紀雄、指揮：松岡究、エルネステーナ：佐橋美起)。



2002年ROF
プログラム(筆者所蔵)

推薦ディスク：

- ・2008年8月ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル上演ライブ Dynamic DYNDVD 33610 (輸入盤) エミリオ・サージ演出 ウンベルト・ベネデッティ・ミケランジェリ指揮ボルツァーノ&トレント・ハイドン管弦楽団、プラハ室内合唱団 エルネステーナ：マリーナ・プルデンスカヤ、ガンベロット：ブルーノ・デ・シモーネ、エルマンノ：ディミトリ・コルチャク、ブラリッキオー：マルコ・ヴィンコほか



¹ 自筆楽譜の消失で金管楽器と打楽器に関して確定せず、採用する序曲によってはトロンボーンが必要になる。
² Philip Gossett., *Rossini's Equivocal, Extravagant Literary Lady*. in programma del ROF "L'equivoco stravagante", 2002., p.13.
³ Gasparriの表記は誤り。ガズバッリの生涯については、Beghelli, Marco. *Vita di Gaetano Gasparri, librettista*. in Bollettino del Centro rossiniano di studi., Anno XLIX, 2009., pp.5-39.参照。
⁴ Stendhal. *Œuvres intimes I*, Gallimard, 1981., pp.771-772. マルコリーニの生涯と出演歴については水谷彰良『プリマ・ドンナの歴史 II』(東京書籍, 1998) 159-168頁を参照されたい。
⁵ 批評の一部は *Rossini 1792-1868*, p.85.に引用。Giorgio Appolonia: *Le voci di Rossini*, Eda, Torino, 1992., p.74 参照。
⁶ ロッシーニが稽古中に起こした一連の騒動に関するドキュメントは Gioachino Rossini, *Lettere e documenti, vol.I, 29 febbraio 1792 - 17 marzo 1822*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni., Pesaro, 1992., pp.20-26.参照。
⁷ 序曲を含む校訂上の諸問題については Marco Beghelli e Stefano Piana., *La nuova edizione critica*. in programma del ROF "L'equivoco stravagante", 2002., pp.37-44.を参照。
⁸ トリエステの上演史では「centone di brani rossiniani manipolato dal Bassi」とされている。 *Il comunale di Trieste* [testi di Vito Levi, Guido Botteri, Ireneo Bremini]., Udine, Del Bianco, 1962., p.122..